

## 『祖国とは国語』 —国語教育絶対論より 藤原正彦著

## 1. 日本再生の急所 ※「国家」を「市」に、「国民」を「市民」に置き換えてみると面白い

日本はいま危機にある。外交、経済、教育、社会。ありとあらゆる領域で、ありとあらゆる議論がなされ、多種多様の改革がなされてきたが、ほとんどが対処療法にとどまっているため、成果を上げずにいる。

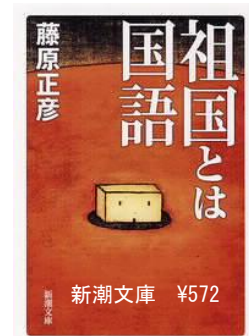
「国家の体質は国民一人一人の体質の集積であり、一人一人の体質は教育により形造られる。」

→国家的危機の本質は誤った教育にある。教育を立て直す以外に、この国を立て直すことは無理である。

我が国の劣化しきった体質を念頭に、いかに教育を根幹から改善するか。

→私には小学校における国語こそが本質中の本質と思える。

「国家の浮沈は小学校の国語にかかっている」



## 2. なぜ「国語」なのか？

## 1) 国語はすべての知的活動の基礎である

- ・国語が思考そのものと深く関わっていることが重要
- ・読書は過去も現在もこれからも、深い知識、なかならず教養を獲得するためのほとんど唯一の手段である。
- ・読書は教養の土台だが、教養は大局観の土台である。文学、芸術、歴史、思想、科学といった、実用に役立たぬ教養なくして、健全な大局観を持つのは至難である。

## 2) 国語は論理的思考を育てる

- ・現実世界の「論理」とは、普遍性のない前提から出発する、きわめて頼りないもの。
- ・説得力のある表現となる「論理」を育てるには、道筋を建てて表現する技術の習得が大切。
- ・これは国語を通して学ぶのがよい。物事を主張させることである。書いて主張させたり、討論で主張させること効果的。筋道を立てないと他人を説得できないから、自然に「論理」が身につく。読書により豊富な語彙を得たり適切な表現を学ぶことも、説得力を高めるうえで必要である。

### 3) 国語は情緒を培う

- ・「論理」の出発点となる前提は普遍性のないものだけに妥当なものを選ぶ必要がある。
- ・この出発点の選択は通常、「情緒」による。この情緒は喜怒哀楽のような原始的なものではなく、高次の情緒が大切。
- ・高次の情緒とは教育により育まれ磨かれる情緒。他人の不幸に対する感受性、美しいものを愛で感動することなど
- ・武士道精神に由来する情緒（勇気・誠実・正義感・慈愛・忍耐・礼節・惻隠・名誉と恥、卑怯を憎む心）などは、感動の物語とともに吸収するとよい。
- ・情緒を養ううえで、小中学生の頃までの読書が大切
- ・情緒の役割は、人間としてのスケールを大きくする。利害得失だけではだめ。
- ・上記のような情緒は我が国の有する普遍的価値。普遍的な価値を創出した国だけが世界から尊敬される。
- ・日本人特有の美しい情緒は、これからの世界が必要とする普遍的価値

### 4) 祖国とは国語である

- ・祖国とは、血や国土ではない。
- ・祖国とは国語であるのは、国語の中に祖国を祖国たらしめる文化、伝統、情緒などの大部分が包含されているからである。 ドーテ『最後の授業』
- ・ナショナリズムとパトリオティズムの違い  
ナショナリズム…自国の国益ばかりを追求する主義  
パトリオティズム…祖国愛、郷土愛。祖国の文化、伝統、自然などをこよなく愛すること。
- ・祖国愛や郷土愛の涵養は戦争抑止のための有力な手立てでもある。

### 3. これからの国語

- ・「子どもを読書に向かわせる」を最大目標にすえた指導法改善が望まれる。  
「話す」「聞く」ではなく、「読み」「書き」を中心に（寺小屋）  
→国家の苦難の克服には時間のかかること、そしてそのための本格的な第一歩は小学校における国語教育の量的拡大と質的改善しかない。